

## 美術作品としての豆本『犬』『猫』

### MINIATURE BOOKS "dogs" AND "cats" AS WORKS OF ART

戸矢崎 満雄 芸術工学部アート・クラフト学科 教授

Mitsuo TOYAZAKI Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Professor

#### 要旨

豆本とは、手に収まる小さな本の総称であるが、はっきりした大きさの決まりはない。本を小さくする目的は、持ち運びのため、隠すためなどが考えられる。昨今では、豆本を手づくりする静かなブームが続いているようだ。その中で、ブックアーティストと自称する赤井都氏を知り、作品としての豆本写真集をコラボレーションで制作することを計画した。

豆本の主題を「犬と猫」とし、自分の長年のミニチュア玩具コレクションからそれぞれ12点を選び1点ずつ自ら撮影し、タイトルを『犬』と『猫』の2冊組と決めた。サイズは40mm角、ページ数は1冊で40頁。活版文字は出来るだけ少なくしようと考え、文字も小さいので、英文を主に使った。

2022年9～10月、京都のギャラリーギャラリーにて豆本『犬』『猫』を展示発表する個展を開催した。そして、アメリカ合衆国で行われるミニチュアブックの国際コンペティション2022に赤井氏が代表で応募し、受賞作3点中の1点となっている。

#### Summary

Miniature book is a general term for small books that fit in your hand. However, there is no definite size rule. The purpose of making the book smaller may be to carry it around or to hide it. Lately, there seems to be a quiet boom in handcrafting miniature books. During that time, I got to know Miyako Akai, who calls himself a book artist, and planned to collaborate with him to produce a miniature photo album as a work.

The theme of the miniature books are "Dogs and Cats", and I selected 12 miniature toys from my long-standing miniature toy collection, photographed them one by one, and decided on the title of the two-volume set "dogs" and "cats". The size is 40 mm square, and the number of pages is 40. I tried to use as few letterpress letters as possible, and since the letters are small, I mainly used English.

From September to October 2022, a solo exhibition was held at a Gallery Gallery in Kyoto to present the miniature books "dog" and "cat". Then, Mr. Akai applied as a representative to the International Miniature Book Competition 2022 held in the United States, and it is one of the three award-winning works.

## 1. はじめに

豆本とは、手に収まる小さな本の総称である。しかし、はっきりした大きさの決まりはない。豆本の起源として『miniature books』<sup>1)</sup>では、紀元前メソポタミアの楔文字が書かれた粘土板が紹介されている。

本を小さくする目的は、持ち運びのため、隠すためなどが考えられる。本のサイズは、身体や内容に応じた適度なもので良いが、特別に小さくすることは、技術的にも困難を要する。

豆本には、文学や絵画を含むあらゆる内容が、通常の本と同じく存在する。印刷や製本の技術、装幀というデザイン、様々な素材を使った工芸的な手わざなど。優れた豆本は、多彩な文化と高度な技法からなる総合芸術ということもできるだろう。

かつて日本では、戦後に豆本のブーム<sup>2)</sup>があった。そのきっかけとなったのは、1935年から1982年まで139冊つくられた武井武雄の作品だった。武井武雄は童画家として知られるが、刊行本による139冊の作品<sup>3)</sup>では、版画を中心に驚くほどの様々な素材や技法を用いて制作している。昨今では、豆本を手づくりする静かなブームが続いているようだ。その中で、ブックアーティストと自称する赤井都<sup>4)</sup>氏を知り、作品としての豆本をコラボレーションで制作することを計画した。



図1 写真集『Boutons Rouges』2011年



図2 コレクション(赤いボタン)のページ

## 2. これまでの制作から

私は美術家として多くの作品を制作してきたが、出版では作品集の他に、2011年の写真集(図1)がある。コレクション写真集『Boutons Rouges』(赤いボタンの本)は、私が数多く集めた赤いアンティーク・ボタン(図2)から162個を選び、自ら撮影し西岡勉<sup>5)</sup>氏のデザインでまとめたものだ。この本は、西岡氏の提案でミニサイズ76mm角の本となった。

また、これまで中古ボタン以外にも、ミニチュア玩具やフィギュアなどを無数に集め、作品の材料としても使用してきた。1983年以降私の制作スタイルは、既製品を大量に使うインスタレーションが主であった。そして1994年からは、中古の日用品を大量に集めて制作する方法に展開してきた。趣味から始まったアンティーク・ミニチュア玩具(図3)などの収集も、それを使った美術作品の制作やインスタレーションとなり、「コレクション・アート」と言えるような表現内容となっている。

更に、作品としての写真は、ミニチュアを接写撮影し大きくオリジナルプリントしたものを額装し、シリーズとして個展などで発表してきた。コラボレーションする理由は、製本というのは高い技術が必要で、私が求める本としての質を求めるには、自分に足りないところを補う必要があったからだ。仕事の分担については以項で詳しく述べる。

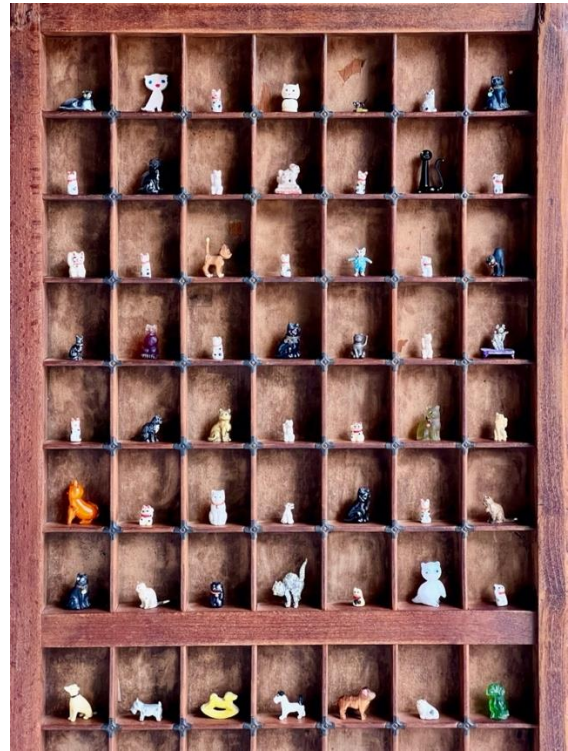


図3 活版文字用引き出しに並べた猫コレクション

### 3. 豆本のモチーフと目的

本をつくる目的は、本という形式が表現内容にふさわしいこと。豆本にする理由は、テーマやモチーフが小さいことと親和性を有し、小ささが驚きを与えうるからである。大事なことは、豆本づくりで何を人に伝えたいか、何を残したいかということだろう。ずっと前から、私は指先ほどの世界各地のアンティーク・ミニチュア玩具を集めている。ミニチュア玩具とは、土産で売っている小さなガラス細工とか、郷土玩具屋さんで売っているなかで、特に小さいものや、グリコのおまけなどもある。

そして、私が特に好んで集めるのは、「犬と猫」である。なぜ犬・猫なのか考えたことがある。それは、身近にいる愛玩動物だからで、あまり野生のものには心引かれない。例えば、熱帯魚より出目金が好きだ。おそらく、それは人間がつくり出した生き物だからで、人間が手を加えた生き物には、何か「あわれ」を感じてしまう。あわれは心情であり、言い換えれば、人間の「自己愛」なのだろう。豆本の主題を「犬と猫」とし、自分の長年のコレクションからそれぞれ12点を選び1点ずつ自ら撮影した。

その主題の設定や本のタイトル、そしてモチーフを選び撮影する過程は全て私が行った。しかし、まず写真があつての設計でなく、本の形状を相談し、形とサイズが決まってから撮影を行っている。写真は全てiPhone11 Proで撮影した後、写真データのモチーフ部分を切り抜き、それぞれのイメージに合わせたフラットな配色の背景に重ねる加工をした(図4.5.6.7)。

### 4. 豆本の形とサイズ

まずは、豆本のサイズについて何度も話し合いを重ねた。ある程度の大きさが必要か、豆本らしく小ささを目指すか。ページ数は、本の厚みと関係するので、少なすぎてもいけない。最近流行している豆本づくりでは、アイデアを凝らしたものが多く、代わりに本としての体裁はかなり稚拙なものになる。豆本というものが、そもそも遊びの要素が大きいので、しっかりした本の造りにしたい。

そして、豆本のモチーフとタイトルは、『犬』と『猫』の2冊組に決めた。サイズは40mm角、ページ数は1冊で40頁。文章は出来るだけ少なくしようと考え、文字も小さいので、英文を主に使った。趣旨のページを和訳すると、

「それぞれ違う場所で生まれた



図4 ミニチュア犬「さぶろう」写真と背景色



図5 ミニチュア犬「炭次郎」写真と背景色



図6 ミニチュア猫「ムギ」写真と背景色



図7 ミニチュア猫「すず」写真と背景色

とても小さな12の犬(猫)たち  
 さまざまな素材を使い  
 無名の職人がつくった  
 指先サイズのコレクション」



図8 制作中の豆本『犬』『猫』（赤井氏の工房）

##### 5. 表紙と本文の印刷

赤井氏の提案で、文字を活版印刷にしたのは、もともと興味があったことと、活版はオフセット印刷と比べると力強いことによる。結果として、カラー写真はオフセット、文字は活版という、とても贅沢な選択をした。紙は、インク乗りと発色が良い「Mr.B オフホワイト」を選んだ(図12、14)。

なんでもありの写真製版と違い、現在使える活版文字の書体は限られるが、今日に残った文字であり、長く飽きのこない厳選されたものだ。活版文字の書体は4種<sup>6)</sup>を選び、赤井氏がバランスを考え構成している。特に、題名と著者名が入るページ(図9)に、美しく文字が並ぶ。

オフセットのカラー印刷は、長年お付き合いのある神戸の「イカル舎」で行い、活版印刷は赤井氏の紹介で、東京は八丁堀の「弘陽」にお願いした。今では貴重な活版の印刷機を、兵庫県生まれの三木弘志さんが、調整して小気味よく可動させる。興味もあった活版印刷の現場立ち合いは、とても贅沢な体験だった。

題名は、表紙に漢字と英語が1文字ずつ、文字組や奥付の表記は、最終的に赤井氏に委ねた。写真脇のページで、それぞれの犬・猫には日本語で名前<sup>7)</sup>を付け、素材と国名とサイズを英文1行で入れた。制作年を入れられれば良いのだが、ほとんどがわからない。

表紙に張る素材については、私が提案した。以前、神戸の廃物業者に中古ボタンを集めてもらった際、山と積まれたネクタイを見て、柄の良いものだけを数百本買い取っておいた。いつか使おうと思っていたものだ。表紙では、題名の紙を貼る部分をあらかじめ凹ませ、フラットにする工夫がある(図11、13)。

ほとんど私はネクタイをしないが、なぜネクタイを集めたかという、良いネクタイは大半がシルクの高級な素材であり、布柄というのは流行りがあるので、同じものを多く製造しないからである。ネクタイ布は、さほど量を使わないから希少な価値がある。

保存していた数百のネクタイから、10本ほどを選び、解体して表紙に使ってもらった。1本のネクタイからは、7~8個の豆本しか作れないので、何種類か違う表紙の豆本になるところも、限定でつくる豆本ならではないと思う。また、本は小さいので、柄がどこで切れるかを計算して布を裏打ちし貼り込んでいる。



図9 豆本の漢字題名と英字著者名などの見出し



図10 金色でオリジナル印刷した猫の「見返し」



図 11 豆本『犬』の表紙とタイトル



図 12 豆本『犬』の見開きに名前と写真頁



図 13 豆本『猫』の表紙とタイトル

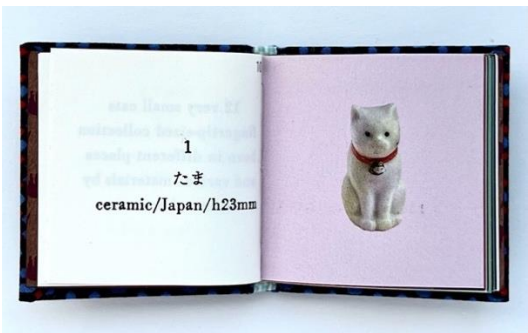


図 14 豆本『猫』の見開きに名前と写真頁

## 6. 見返しと製本と函

本で意外に重要なのは「見返し」<sup>8)</sup>である。古典的な装幀でよく見られるマーブル紙は、革表紙と相性が良いが、柄布とは合わない。わりに悩んだ末、犬・猫のシルエットでパターン柄をデザインし、オリジナル

紙(図10)をつくることにした。

印刷の後、赤井氏の根気と技術のいる製本作業(図8)となる。かつては、職人も多くいたであろうが、今では糸綴じ製本をする人も需要も少ない。まして豆本なら、ほとんど趣味の世界になってしまう。時間に追われる現代だからこそ、手間ひまかけるのは贅沢なものだ。

製本は、糸を使って綴じる伝統的な上製本で、糸かがり綴じで行う。「花布」<sup>9)</sup>には、フランス製の細かい柄を使い背固めしたという。少ないとはいえ、本をつくるのなら数も必要になる。それだけに、熟練も必要だし、小さくなる程に手作業は難しくなってしまう。

豆本『犬』『猫』は、単独でも良いし、ペア本としても観てもらいたい。そこで、赤井氏が、ぴったりの「函」<sup>10)</sup>を考案してくれた。外観はシンプルなものだが、紙色(あんず)や罫線にもこだわりがある。(図15、16)実際に手で開けてみた時には、ハッと驚いた。制作数は2冊入りで22セット。単品は、合わせて16冊の特別な限定本となった。



図 15 函に入った豆本『犬』『猫』セット



図 16 開くと2冊の表紙が差し出される函と豆本



図 17 個展会場でガラスケースに入った豆本の展示

#### 7. 個展での発表と国際コンテスト

2022年9～10月に京都のギャラリーギャラリーで、豆本『犬』『猫』を展示発表する個展(図17)を開催した。同時に、同年7月に新潮社図書編集室からの著書『bijou book 珠玉の豆本』(図18)の出版記念展とした。著書の中には、豆本『犬』『猫』制作についても解説している。また、ギャラリーでは、豆本のモチーフとなったミニチュアコレクション「犬・猫」それぞれ49点ずつの展示も行った。

その後、アメリカ合衆国で行われるミニチュアブックの国際コンペティション<sup>11)</sup>に赤井氏が代表で応募し、受賞作3点中の1点となっている。

赤井氏は、2023年4月末から東京の中野ブロードウェイというギャラリーに、受賞作の豆本『犬』『猫』他の自作品を展示して『秘密の宝箱』と題する個展を開催した。

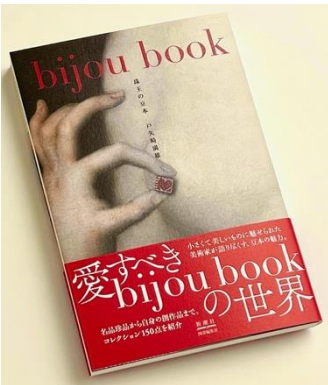


図 18 戸矢崎満雄、『bijou book 珠玉の豆本』新潮社、2022年

#### 参考・注

- 1) Anne C. Bromer/Julian I Edison, *miniature books*, Abrams, 2007
- 2) 全国的なブームの火付け役となる『ゑぞまめほん』北海道豆本の会刊、1953年
- 3) 斎藤正一、『百三十九冊の不思議な本 武井武雄の刊本作品』文化出版局、1984年
- 4) 赤井都氏は『鑑賞マニュアル「美の壺」小さな幸福ミニチュア』NHK、2020年で紹介された
- 5) 京都に在住するグラフィックデザイナーで、関西で開催される主要な美術展のポスター、図録デザインの多くを手掛ける
- 6) 活版文字は、Garamond、Bodoni、Century Italic、和文では明朝体も使用
- 7) 犬の名前は、1番からイチロー、炭次郎、さぶろう、平四郎、五郎丸、六助、七星、クマハチ、九ノ助、ハヤト、十一子、トニ造。猫は、たま、オリーブ、小梅、ムギ、大福、すず、小鉄、ルナ、マロン、空、モモ、まる
- 8) 見返し紙は、臙脂色のタント(70kg)に金1色でオフセット印刷
- 9) 花布は背の上下を飾り、背固めにはJade R(接着剤)を使用
- 10) 観音扉のように左右に開くと、本が飛び出すような仕掛けの函
- 11) ミニチュアブックソサエティ(本拠地アメリカ)で毎年開催される国際的な豆本コンクールで *MBS book competition distinguished award winner* を2022年に受賞